

旧戸畑区役所を図書館にリファイニング



戸畑図書館。帝冠様式の外観は改修前と変わらない



1階ロビーには吹き抜けを通して明るい光が降り注ぐ(写真/上田 宏)



2階の吹き抜けから下をのぞく子どもたち



首都大学東京 特任教授
株式会社 青木茂建築工房
主宰

青木 茂氏



大阪市立大学大学院
工学研究科
准教授

倉方 俊輔氏

帝冠様式の塔屋をいただき、壁面はスクラッチタイルに覆われた重厚な外観。昭和8(1933)年に当時の戸畑市庁舎として建てられ、平成18(2006)年まで戸畑区役所として使われてきたこの建物が、この3月、おしゃれな図書館に変身した。手がけたのは『リファイニング建築』で知られる建築家の青木茂氏。新図書館をご案内いただきながら、リファイニング建築の神髄を伺った。インタビューアは建築史家で、北九州の近代建築の保存やまちづくりにも携わっておられる倉方俊輔氏にお願いした。

●軽量化と耐震フレーム、明るい子供図書館

クラシカルな意匠の玄関を入ると、光が降り注いだ。頭上には楕円のような吹き抜け空間。光は屋根の明かり取り窓から差し込んでいた。建物はT字型で、廊下には不思議なたちの鉄骨アーチがかかる。

倉方 明るいですね。

青木 2階床スラブを打ち抜いてエントランスホールを吹き抜けにしているからね。不要な壁や柱、梁の仕上げ材も撤去しています。

倉方 廊下のアーチは耐震性を考えたものですか。

青木 そうです。建物中央の廊下に耐震フレームを設置して、地震時の水平応力のみをこのフレームに負担させている。各フレームは4本の柱をアーチ状の梁で繋いだ構造になっていて、直下の基礎を補強して一体化させています。

倉方 それによって外観に手をつけずに見通しのいい空間が実現できたのですね。

青木 この建物が竣工した昭和8年頃は、建築様式がアールヌーヴォーからアールデコに変わる時期だし、戸畑は鐵の町だから、スチールで補強をしようということ、はじめから考えていました。

倉方 それで、構造設計を金箱温春氏と一緒に。

青木 彼とはキャッチボールしながらアイデアを煮詰めていくことができる。こういう仕事ではパートナーは大事です。

倉方 この構造補強のアイデアにヒントはありましたか。

青木 最初に耐震診断をした時には I_s 値(構造耐震指数)は0.28。0.6が安全の基準値だから半分もなかった。歴史的な建造物ですからね、耐震をするにしても外壁にバツテンはできない。ヒントになったのは伊東豊雄さんが設計した仙台メディアテーク。外壁のガラスは全く耐力を負担していないでしょう。ああいう方向で考えれば外壁を

補強しなくていいだろうと思った。

倉方 耐震フレームの存在のさせ方が面白いですよ。普通は耐震補強材は見ないふりをするように黒く塗ったりするのに、これはそうではない。

青木 存在感があるでしょう。これ、相当高等なわざを使っているんです。できるだけ圧迫感をなくすようにぎりぎりまでアーチをあげて、これ以上は無理ってところが現在の位置。(笑)

倉方 一番陽が当たる明るい場所に子供図書室があるんですね。

青木 いいでしょう。市民図書館なので、できるだけ皆さんが入りやすく集まれる場所にしたいと思って。

倉方 パイプ状のライティングがかっこいいですね。

青木 本当は天井を張る予定だったんですが、コストの関係で我慢しようと言うことになって、それならかっこよくしたいと、スカイツリーの照明デザインをした戸恒浩人氏に頼んだ。最近夜の工場見学も人気だと言うから、パイプ状の照明も工場っぽくていいんじゃないかと。

倉方 耐震フレームも、このライティングにしても工業的で率直、かつ明るい。北九州らしさの新たな表現になっていますね。

●先達への敬意を込めた空間

2階への階段は、唯一新設した施設。ガラスの筒状で、外壁のスクラッチタイルの新旧を間近に見ることができる。2階のラウンジでは子どもたちが吹き抜けから下をのぞきこんでいる。中央から奥が元議場を活用した閲覧室。広々とした空間全



体が明るい光に満たされている。正面上部壁面に鏡が張られているが「合わせ鏡です」という青木氏の言葉に振り返ると、入り口上部の壁も鏡張りになっている。

倉方 これはすごい。正方形と鏡面がつくるイリュージョンの空間。これ、磯崎新さんへのオマージュですね。

青木 磯崎さんは僕の郷里大分出身の先輩で、すごく影響を受けた建築家。丁度僕が高校生の頃に大分図書館ができて、強烈な印象を受けた。磯崎さんが提唱したプロセスプランニングを、どう解析し直すかというのは、ある意味、自分の使命みたいなものだと思って。合わせ鏡は最初から狙って、磯崎さんが考えたことと正反対のことをやろうと思っていた。

倉方 大分から北九州へ。大分県立中央図書館(1966)の後、北九州の市立美術館(1974)や中央図書館(1975)で作家としての地位を不動のものとした先達を、青木さんがこのように意識され、表現されるとは……、意外でした。

プロセスプランニングとは、磯崎新が成長する建築のために表した設計思想。将来の増築を見込んだ仮想的な建物を「切断」したものが現在の建物であるとする考えで、旧大分図書館では正方形の端部を露出させた梁が、そうした切断の行為を象徴している。

倉方 ここに立つと、にやっとさせられますね、建築ファンは。

青木 実はこの建物の改修工事にとりかかる前に、先日亡くなられた鈴木博之先生(建築史家)にお願いして見ていただいたんです。初めて歴史的な建物を手がけるので、鈴木先生にどういうふうにしたらいいですかねって言ったら、いやー好きにやったらいいよ青木さん。もうあなたしか出来ん



(8頁左) アーチ状の鉄骨フレームに開けられた穴はアールデコを思わせるデザイン

(8頁右) 元議場を活用した閲覧室は正方形と鏡に囲まれた不思議な空間

(9頁左) 日当たりのいい場所に設けられた子供図書室は大にぎわい

(9頁右) パイプ状のライティングが工業都市北九州らしい美しさを表現している

のやからって。(笑) だけど、合わせ鏡のことは言わなかった。できあがったら、見ていただいて、これをどう評価されるか伺うのが楽しみだったんです。

倉方 大笑いしたでしょうね。

青木 絶対笑ったよね。(笑)

倉方 トップライトは新たに開けたんですか。

青木 開けました。

倉方 天井が高く気持ちいいですね。窓からは山も見えて、すがすがしい。外に目が向くようにつくられているから、子供が窓側の席で楽しそうに本を読んでいますね。

青木 窓そのものは元のままです。空間のプロポーションをできるだけ生かしたいから開口部は一切手をつけなかった。

倉方 もともとこれだけ窓があったわけですよ。それが市庁舎の時代は外に目を向けるということはなかったから気づかなかった。今の使われ方がむしろ本来のこの建築の良さを引き出している。そう思えるようなものにコンバージョンすることが、リファイニングの最大の意義ですよ。

新たに設置されたエレベーターで地下へ。そもそもこの建物は緩やかな傾斜地に建っているため、正面から見ると2階建てだが、裏から見ると地階を入れて3階建てになっている。その地下を荷重のかかる本を置く場所に活用。外部からの搬入路もつけた。地下の書庫から地上へと階段を登ると1階のリファレンスの横に出る。

倉方 なるほど、使いやすい動線ですね。図書館として全く無理がない。

青木 とにかく機能をどうするかということをまず考えます。耐震も機能を妨げないようにしなければいけない。

●初の歴史的建造物リファイニング

倉方 青木さんのオープンマインドが建築に現れますね。子供がイキイキしていて、みんな楽しそうでした。あれが本当にいい建築の証明だと思いました。

青木 どうも僕の建築は人が集まってくるみたいです。

倉方 青木さんにとって歴史的な建造物のリファイニングは実は初めてなんですよ。

青木 ええ。不安に思っている人、多いでしょうね。(笑) だいたい文化財の保存を主にしている人が手がけるのが普通ですよ。この建物は、再生できるのかスクラップアンドビルドした方がよいのか、議論があったようです。しかし歴史的な建物を残して、なおかつ使いつづけたいということになって、コンペではなく特命で私に依頼が来た。

倉方 そうでしょうね。このような質を実現する仕事は特命でないと難しい。

青木 終始、市長も含めて行政の側がぶれずにいてくれたことはありがたかったですね。それと建築課のOBの人が技術の指導に当たってくれたのも助かりました。

倉方 最初にどういうことを考えられましたか。

青木 僕はこの建物をこれから100年生きていく建物にしたいと思ったんです。そのために、まず建設当時のオリジナルに戻して、増築部分を取り、空間プロポーションを見直し、それから補強を考えた。何を補修するか、どういう力を与えるかで設計も大きく違う。最終的には、鉄骨アーチと最小限のRC耐震壁で補強して、吹き抜けとトップライトを新たに設けて室内環境を改善したほかは、構造物としては階段とエレベーターを付け加えただけです。

倉方 保存として考える人は、よほどの理由がない限りは、新しい要素を付け加えるということはない。普通は、このようなトップライトを新設したり、床を抜いたりということまでは踏み切れないでしょう。しかしこれによって高さも生きるし、なにより明るい空間が誕生した。実際に使った時に、吹き抜けの空間は、みんなが見上げたりのぞき込んだりする。この建物がもともと持っていた良さを引き出しています。青木さんは、それを表面的な意匠ではなく、あくまでも空間を操作することで行っている。本来あるものを空間の設計によって生かしています。正統派の建築家の仕事として感服しました。

青木 結局、今合理的につくるとこんな空間はつくれない。まず市の予算では不可能。



倉方 そこは歴史的な建物のよさですね。

青木 どうして吹き抜けの空間なんてつくったのかって言われたら、耐震化したら、今より確実に重くなる。その分だけ引き算しましょう、と答える。それに対して誰も反論はできない。

倉方 一番大変だったのは、どういう点ですか。

青木 それはやっぱり補修です。壁をはずしたら、ぼろぼろ壁が付いてくる。え！って感じでした。大体補修費は全体の工事費の5%くらいは見ておくんです。しかし開けてみないとわからない。実際にはコンクリートの中性化対策などで追加が1億！担当者も青くなった。かなり設計変更もしましたし、市の関係者の方々のご協力や努力がすごく助かりました。ただ同規模の図書館を新規でつくるのとはコストは同じでも価値ははるかに高い。

倉方 そういう意味でもリファイニング建築の方が新築より総合力を試される。まさに建築家の仕事ですね。

青木 そうですね。歴史的な建物を保存して、これからさらに100年使えるようにするには耐震補強だけやっていてもだめ。

倉方 100年の構想力が必要。この建物はこのエリアのプライドとしてある、ということが100年経ってもあり続けることに繋がります。

青木 そうです。もう一つ、金箱さんと話したのは、将来もっとすごい耐震方法ができたときには耐震アーチをはずせるようにしておこう、ということでした。

倉方 それは文化財の保存修復の基本的な考え方と全く同じですね。

青木 今回はそういう実験もいっぱいしています。長寿命建築って僕が初めてつけた名前ですが、それには何が大切かという機能を考えることです。たとえばここは、将来防災拠点にするつもりだから、電気が使えないときを想定して採光・通風をよくしておく必要があった。トップライトを設けたのもそういうこともある。

倉方 シンボルとして建ってるものが、耐

震としてもしっかりしていれば、本当に市民の心の拠り所になる。青木さんは設備も構造もお金の話も出来る。それらを引き受けられる建築家が他にあまりいないので、青木さんというところが強調されがちですが、建築の魂をきちんと維持していくためにそういうことをやってるのであって、本質はアーキテクトだというのが私の見立てです。(笑)

青木 確かにこれまでであえてデザインの話をしたくなかった。それは見ればわかる。感じてくれればいいと思っていたから。でも今回のように歴史的なものをやってみると、語りたくなるよね。それはね、新築ではできないものがあるから。過去にこの建物に関与した人の思いをどう受け止めるかというときに、ある種の時間を越えた建築のつくり方とか、そういうのがないできない。新築は一から全部自分がつくる。ところが、こういう歴史的なものは、自分も歴史の一部にならないとだめなのね。時間の中に身をゆだねる、というところがないとだめ。歴史の一頁に自分が立ち会って、その後どう繋がって行くんだらうということ予測しなければいけない。そういうときに意匠的なこととか、空間的なこととかは、重要なファクターになる。

倉方 新旧をぶつけて、その断絶から面白いものが生まれる、ということもありますが、青木さんの手法はそうではない。コラボレーションですね。構造設計者の金箱さんや照明デザイナーの戸恒さんとコラボレーションを成功させたように、この建物のオリジナルデザインに対しても、どこまでどちらが担当したのか分からないような巧みな協働になっている。こうした歴史的建築の再生手法は、あまり他ではみることができない。青木さんの個性ですね。もう一つとても感服したのが、建物の中と外が繋がっていて、市民に開かれた感覚を与えていることです。広々として外の風景に繋がって行く感じがすごいいいですよね。

青木 いかにバリアをつくらないか、安全かつ入ってきやすいか、というのは大切な

テーマです。ここでもそれはかなり意識した。扉は全部とって、ただし車はちゃんと入ってこられて、増えたらちょっと違うスペースに停められるように工夫した。

倉方 これまでの建築は時間軸も地理軸も新築の時点で完結しがちですが、青木さんのものは時間軸も地理軸も延びていってる。この建物では中の人のアクティビティーに外の環境が働きかけている。そこまでコントロールするのがこれからのアーキテクトだと言えそうです。

●持続すること

青木 ヨーロッパで古い建物を上手にリノベーションしているのを見て、こういう建築を日本でもつくれないかなあと思ってましたが、やっとできた。よく日本では地震があるからヨーロッパのように建物を使い続けることができないというけど、そんなんじゃないよということも言いたかった。

倉方 空間に対する構想力ですね。青木さんは空間を通して昔の建築と今の建築を繋いでいる。

青木 しかし今まで何度もこういう仕事のチャンスがありながら結局だめだった。今思えば、説得するだけの力が自分になかったんでしょね。やはり年齢を重ねないとできないものがある。諦めないことだね。

倉方 そう。とにかく持続してつくる。

青木 僕は、補修と補強の記録を全てとっているんです。そうすることで、100年建築って可能になると思うんですよね。自分の仕事に責任をもつためにはじめたことですが、膨大な記録があるので、のちにリファイニング建築が学問として成立するといいなあとと思っています。

倉方 歴史的建造物に市民図書館という魂を込め、これからの100年、市民の誇りとして生きる建築に再生した。この建物は日本の保存改修の新たな1頁を刻むものだと思います。今日は本当に来て良かった。

対談者略歴

●青木 茂 (あおき しげる)

1948年大分生まれ。博士(東京大学工学)。2008年より首都大学東京戦略研究センター教授。2013年に同特任教授。2011年より中国・大連理工大学客員教授。1977年にアオキ建築設計事務所設立。のちに青木茂建築工房に組織変更。1990年代にリファイニング建築で実績を積み重ね、2001年にはリファイニング建築に関する取り組みにより日本建築学会業績賞を受賞。著書に「リファイニングが導く公共建築の未来」など多数。

●倉方俊輔 (くらかた しゅんすけ)

1971年東京生まれ。大阪市立大学大学院工学研究科准教授。伊東忠太の研究で博士号取得。著書に「ドコノモン」「吉阪隆正とル・コルビュジェ」、共著に「東京建築みる・あるく・かたる」「東京建築ガイドマップ」「伊東忠太を知っていますか」など。前職の西日本工業大学准教授時代に北九州のまちづくりに関わり、今も活動を続けている。